

地域経営学講座（都農寄附講座）活動報告（2023 年度）

—地域経営学講座（都農寄附講座）における実践教育の試み—

瀬川直樹（地域経営学講座）

出口近士（同上）

1. はじめに

令和2年4月より宮崎県児湯郡都農町が開設した寄附講座（地域経営学講座（以下、講座））の活動も4年目を経過しようとしている。開設の経緯や全体フレーム、学部カリキュラムにおける講座の位置づけやねらい等のほか、これまでの取り組みについては別稿¹⁾にて説明していることから省略し、本稿では2023年度における活動について報告する。

今年度より2、3年生向けの選択科目 PBL（Project Based Learning）を1年生向けにも開設した²⁾。約30名の履修があり活動内容も多岐にわたった。それらも含め、本稿作成時点では継続中の活動もあり、中間報告にとどまることを予めお断りする。

2. 正課における実践

2.1 地域学基礎（1年次前期必修、以下、「基礎」）

2022年度から講座で担当した科目であり、資源論、「地域資源マップ」（以下、マップ）づくりの実践、ゲストスピーカー講義、地域政策論、地域論で構成した（表1）。

前段では、フィールドワークの目的や意義やフィールドノートの使い方などについて触れた後、資源論の系譜と現代的到達点までの概略を説明した。ここまでで既存学問分野を超えた領域に未解明（決）な事物があり、その「創成」こそが本学部の学びの「本丸」であり使命であることを解説した（第1、2回）³⁾。

それを踏まえ「基礎」における地域実践である都農町をフィールドとしたマップ作成（第4

～9回）に取り組んだ。

表1 「基礎」の各講義の内容

講義回	内容（シラバス上のタイトル、講義概略ほか）
第1回	イントロダクション；a. シラバスの説明, b. フィールドワークとフィールドノート, c. 異分野融合とは？そして複眼的とは？, d. 大学生はお客様ですか？
第2回	資源概論；資源論の系譜と現代的到達点—本当の資源は目に見えない！？
第3回	地域資源マップをつくる①；ベースマップの作成
第4回	地域資源マップをつくる②；a. 作成に向けた全体の流れ, b. 意義・ねらい（「近現代地図」と何が違うのか—近現代がとりこぼしたものをみるということ）、c. エクスカーションの注意事項
第5～7回	マップづくりのためのエクスカーション（約5名×20班、各半日、於 都農町）
第8回	地域資源マップをつくる④；a. 問い—私たちは地域に何をみたのだろうか, b. マップ作成に向けた打合せ
第9回	地域資源マップをつくる⑤；共同作業
第10回	都農学Ⅲ；都農ワインのあゆみ—地域、風土（テロワール）、市場への働きかけ（（株）都農ワイン代表取締役社長 赤尾誠二氏）
第11回	都農学Ⅰ；都農町のこれからは；衰退の危機を脱するために（都農町長 河野正和氏）
第12回	都農学Ⅱ；官民連携のまちづくり（つの未来財団業務執行理事 山内太輔氏）
第13回	国土（地域）政策と地方創生；なぜこんなことになってしまったのか（その1；戦後から高度経済成長期の地域開発論）
第14回	国土（地域）政策と地方創生；なぜこんなことになってしまったのか（その2；安定成長期～平成不況期以降の地域開発論、そして今）
第15回	地域論あれこれ；a. 地域学、地方主義、ロカリティの概念に触れつつ「地域とは何か」について考える, b. 「地方創生」時代から地域資源論を展望する, c. 地域資源マップ再考（社会的表象論、ポストモダン思想などからの展望）、d. 地域資源創成学部求められる領域横断的視野, e. 地域資源マップの優秀作発表（3班）

出所）筆者作成

100名の受講者を20の班に分けて町内エリアを歩き、また場合により住民ヒアリングなどを行い、それぞれが感じた地域資源をプロットしていく作業である（図1、写真1）。このねらいは、地域の未活用資源のみならず問題点や取り組み課題も含めて地域資源として位置づけ、

自由な表現様式をもって地域や地域社会全体を描いていくことにある⁴⁾。

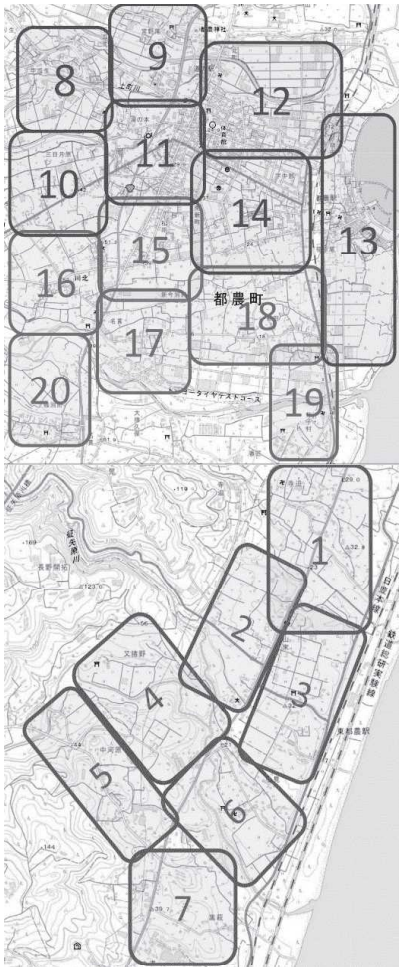


図1 地域資源マップ作成エリア（上、都農駅周辺、下東都農駅周辺）

注) 数字は担当の班番号



写真1 地域資源マップ作成のためのフィールドワークの様子

第13、14回講義「国土（地域）政策と地方創生」では、「地方消滅」が言われ始めた昨今の危機的状況について、その原因や解決策を少子高齢化社会の趨勢に求めようとする考え方を乗り越えるため、戦後の国土計画、地域開発政策の系譜から説明した。とりわけ戦後の地域開発が、地方部に十分な就業機会を形成できないままに、国土の全体に市場社会の消費パターンを過度かつ急速に浸透してしまったこと、すなわち国民経済の変動と国土政策により多くの地方部から人口が流出し、その場所で豊かに生きるための固有の知恵が失われ、またヒト・モノ・コトにおける様々な繋がりが断ち切られたこと（断片化）が「場所の固有性・多様性」の喪失（脱場所化）につながり、「地方消滅」の危機的状況をより深刻なものとしていることへの理解を促した。

「地域論あれこれ」と題した最終回では、各講義の関係性から全15回の講義の意義とねらいを改めて振り返った。第一に、地域概念の重層性とそれをめぐる思潮の変遷について、地域を切り口とした諸学問分野の見解を紹介した講義内容を跡づけつつ、「場所の固有性・多様性」を取り戻すことこそが、本学部の学生が目指すべき地域資源創成の姿であり、それは「誰もが安心して生きられる固有の空間を取り戻すことにほかならない」とした。そして「基礎」においてマップづくりを導入したねらいは、まちづくり社会实践に向けたメディアとしての可能性にくわえ、より本質的には場所の固有性や地域的な多様性についてのより深い思考を促すためであったとした。

第二に、ゲストスピーカーとして都農町長、まちづくり団体代表理事、(株)都農ワイン代表取締役を招聘し、前二者は「地方創生時代」のまちづくりについて（都農学Ⅰ、Ⅱ）、後者は地域資源を活用した地域企業の歩みについて（都農学Ⅲ）の講義としたことについてである。前

二者は「地方消滅」の危機のなかでの地域づくりの実際として第 13、14 回講義に対応し、また後者は固有の風土と地域社会に働きかけ地域に根差した資源の創成に邁進した地域企業の取り組みとして第 2 回講義に対応する。

「基礎」の講義のシラバス設計においては、マップづくりを中心に据えつつ、多くの「なぜ？」を講義全体に散りばめたうえで最終回にてそれらを「回収」し、地域資源創成をいかに考えるべきかを改めて検討する構成とした。

「基礎」の各講義が地域資源創成を考えるために構成されたものであることを最終回において示すことで、学生に改めて講義全体の振り返りを促し、また本学部に入学したことの、学生ら自身にとっての意義についての再考を促すことを強く意図した（図 2）。

最後に、マップづくりに際して若干補足したい。ここでは近現代の地図と「基礎」におけるフィールドワークを通じて作成するマップとの違いについて示した（表 2）。この対比は、利便性、市場性、計算可能性といった、社会の効率化を目的とした表象としての前者と、そこから「こぼれ落ちた」部分・領域を表象する後者

との比較である⁵⁾。講義では、後者のもつ可能性や創造性、さらにはマップがひとつのメディアとして個々の地域における社会的実践と結びつく可能性⁶⁾などについて実例を交えて理解を促した。

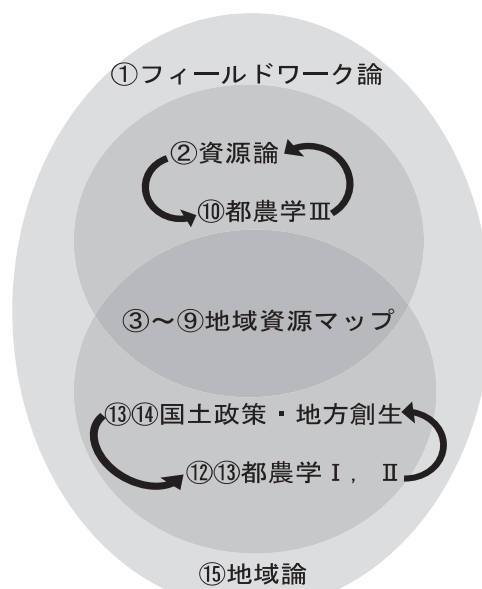


図 2 「基礎」の各講義の関連
注) 丸数字は表 1 の講義番号に対応
出所) 筆者作成

表 2 近現代の地図とマップの認識、表象の対象などの比較

	近(現)代地図	<マップ> スケッチ, イラスト, パース……etc.
社会認識・想像力の局面、造形作用、表象	全体の表象化	不在の対象(想像としてのイメージ)の現前化
表象の対象	観察対象に変質した世界 空間(space)	生きられた世界の共感的表象, 全域なき世界 場所(Place)
起源	鳥瞰図(的技法)	虫瞰図(的技法)
準拠系	普遍的座標系	原生的な自己中心的で動的な「まなざし」
把握される世界の構造	記号体系の構造	心の構造
認識のための言語	人工言語	日常言語
依拠する人間の心的能力	悟性, 科学的認識	想像力, 五感
目の位置	なし(虚の視線, 想像上のイデアルな視線, 無限遠点の宇宙空間から地表に垂直におよぶ視線)	経験のパースペクティブ
意識, 行為者(当事者)性	客観性	主観性, 間主観性, 共同主観性
構成	断片の合成, 標準化された経験から構成	合成不能, 非構成的
不問にされたもの	個人(私)の特有の体験, 場所の経験, 生きられた世界に置かれる視点	全体世界(迷宮化)

出所) 厚東(1991), 若林(2009), Tuan, Y(1977), Relph, E(1999), Berque, A(1982, 2009), Jonston, R, J(1991) などをもとに作成

2.2 地域探索実習Ⅱ（2年次前期必修）

企業経営の実際についてのヒアリングや現場見学を通じて、マネジメント力を涵養することを目的とした実習である。学生にとり2年次後期からのゼミ（実践Ⅰ～Ⅲ）配属直前の、いわば本学部での本格的な専門教育段階への移行に向けた総仕上げの地域実習である。

県内の企業を訪問し、経営者等との対話を通じて、マネジメントコア科目群⁷⁾で学んだ知識を用いて実際の経営現場に触れる。事前学習では自身が訪問する企業が立地する地域の産業構造を各種資料から分析したうえで臨み、最終レポートでは、事業構造（商流・物流）分析、マーケティングミックス分析、バリューチェーン分析等に取り組む。今年度は7月7日に実施した。

午前中に口蹄疫メモリアルセンターに訪問した後、午後からは3つのグループに分かれ（株）都農ワイン、（株）都農まちおこし屋、河野農園（株）（各約20名）に訪問した（写真2）。それぞれ産業分野も、そして当然訪問の主眼点も異なる（表2）が、いずれも地域の風土や産物を価値の源泉とし（株）都農ワインは尾鈴ぶどう生産者を、（株）つのまちおこし屋は町内小規模零細農家を支える役割を担っている。河野農園（株）は製品の差別化を通じて高付加価値化を実現し地域雇用を生み出している。学生には、地域企業論的視点、すなわち、それら企業の立地点がほかならぬ都農町でなければならぬ側面を捉えることを共通の課題として求めた。

表3 地域探索実習Ⅱの訪問先（都農町）と主なねらい

訪問先	訪問の主なねらい
（株）都農ワイン	地域企業における自然、地域社会への働きかけと経営哲学、製品開発に向けた取り組みなど
（株）都農まちおこし屋（道の駅つもの）	施設設置の目的・経緯、現在の町経済における役割、顧客のターゲットなど

河野農園（株）
（ミニトマト主力
の農業法人）

JAを通さずに大都市圏や海外のハイエンド市場をターゲットとした高付加価値経営の実現、家族経営農業との差異など

出所：講座による実習計画等により作成。



写真2 （株）都農まちおこし屋（上）、（株）都農ワイン（下）への訪問の様子

2.3 地域探索実習Ⅰ（1年次後期必修）

学部における本格的なフィールドスタディの入門的実習として位置付けられる。約100名の履修生を6つのグループ⁸⁾に分け、県内の市街地ならびに農・山村部をそれぞれ1地域ずつ訪問する。そして市街地と農村・山間部の現状や違いについて触れ、それぞれの実習地が抱える地域問題やその解決に向けた課題、利活用可能な地域資源等を析出する力を習得することを目的とする。

都農町はその立地的性格上、市街地と農村・山村のすべてを擁することから、本科目においては農・山村部を一括して扱った（12月15、22日実施、表4、写真3）。

表4 地域探索実習Ⅰグループ⑥の実習概要

日時	概要
都市部 11月8日（水）午前	<ul style="list-style-type: none"> ・都農町まちづくり課、建設課、（一財）つの未来まちづくり推進機構による講話と質疑 ・地域資源マップ作成に向けたまちなか探索
午後	

<p>農山漁村部 12月15日（金） 22日（金）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・医学部・地域包括ケア・総合診療医学講座（都農町国民健康保険病院院長） 桐ヶ谷 大淳先生講話と質疑 ・寺迫地区（農村部） ・立野地区（山村部） ・下浜地区（漁村部）
--	---

出所：講座による実習計画等により作成。



写真3 都市部成果発表会（左、11月24日）、農村部訪問（右、立野地区、12月22日）の様子

2.4 ゼミナール

(1) 瀬川ゼミ4年生（卒業研究、3名）

4年生は、3年次に実施したゼミ活動の成果を取りまとめ『宮崎県内自治体における空き家対策の現状と都農町の居住・生活環境に関する実態調査』報告書を刊行した（写真4）。都農町における空き家対策に資する情報の収集を目的として、主に①全国的な問題状況の整理、②県内7市町への空き家対策の現状についてのヒアリング調査、③宮崎日日新聞データベースの情報分析、④都農町内約2,400世帯へのアンケート調査による分析ならびに町民ヒアリング調査、⑤都農町下浜地区の空き家発生状況のヒアリング調査、⑥空き家対策に関する政策提言により構成した。

本報告書は、ヒアリング協力先自治体、調査協力者のほか、都農町執行部ならびに建設課、まちづくり課、町議会議員に送付したほか、国会図書館、宮崎県立図書館をはじめとする県内の公立図書館等に献本した。また学術機関リポジトリデータベース（IRDB）、地域経営学講座ホームページにても公開した。



写真4 瀬川ゼミ4年生による報告書ならびに発送準備作業

なお、現在取り組んでいる卒業研究のタイトルを以下に示す。

- ①最寄り品購買方法の実態に関する研究：都農町を対象として
- ②縦型ショート動画を用いた地域広報の可能性：都農町の広報動画試作と分析
- ③密集住宅地における空き家の発生要因と予防策に関する研究：宮崎県都農町下浜地区・日向市細島地区・川南町通浜地区を対象として

(2) 瀬川ゼミ3年生（実践Ⅱ、Ⅲ、2名）

3年生は、テキスト学習（一部、2年生と合同、後述）都農町における伝承文化についての調査研究に取り組んでいる。

元々地域の伝承や文化に興味があり、それについての文献を読み進め⁹⁾るなかで農村伝承の重要性という点について関心を持つようになった。本研究では、かつての農村生活者の「暮らし」を、ヒアリング調査を通じて農村生活者の「記憶」から読み解き、農山村のような地域が存在することの重要性・必要性を考えることを目的としている。卒業研究のテーマとしても取り組むこととしており、この3年次の活動を卒業研究に向けたボーリング調査として位置付け、本年度9月よりヒアリング調査を実施してきた（表5、写真5）。今後、中間報告としての取りまとめを実施したうえで、卒業研究に向け、次年度も引き続き継続調査を実施する方針である。

表5 瀬川ゼミ3年生による農村伝承調査訪問先の「概要」

訪問日	地区	インフォーマントの職業・年齢、取材行事など
9月3日(日)	立野	2名(農業、自治会長、48歳、農業、62歳)
9月12日(火)	福原生	農業、75歳
9月16日(土)	篠別府	農業、農協役員、自治会長、57歳
9月22日(金)	新今別府	元農業、81歳
9月29日(金)	立野	十五夜
10月21日(土)	駅前	元郵便局長、81歳
10月27日(金)	征矢原	元農業、79歳
10月27日(金)	新今別府	主婦、87歳
10月28日(土)	福原尾	駄祈禱(水神祭)
11月1日(水)	立野	駄祈禱(水神祭)
11月3日(金)	北新町	元記者、80代
11月19日(日)	立野	営林署、年齢不明
11月23日(木)	明田	元農業、79歳
11月24日(金)	佐土原	元都農高校教員、現都農町社会教育課非常勤、74歳



写真5 瀬川ゼミ3年生のヒアリング調査の様子(左、9月3日、立野地区、右、9月21日、福原尾地区)の様子

(3) 瀬川ゼミ2年生(実践I、3名)

2年生は、テキスト・文献講読を中心に学習を続けてきた。人文地理学の基本テキストのほか、農山村を中心としたさまざまな地域問題を扱った文献にあたった。単行本を講読順に示すと、鳥越(2023)、竹中編著(2015)、三俣・齋藤(2022)、渡邊ほか(2023)である。雑誌掲載論文では同様に、川田(1992)、辻本(2012)、山元・松本(2016)、岡本(2012)、村社(2019)である。

これらにくわえ、地域行事都農町藤見地区における地区行事「令和6年藤見そば打ち交流会¹⁰⁾」(2024年1月21日)への参加ならびに行事の成立要件についての実態調査を実施した。交流のための蕎麦の生産から自治会員の作業状況、費用等の詳細情報を収集し自治会行事として持続させる工夫やフレームワーク等についてヒアリングした(写真6)¹¹⁾。



写真6 瀬川ゼミ2年生の地区行事への参加・実態調査(1月21日、右下は当該行事の持続性についての分析のノート)の様子

(4) 出口ゼミ4年生(卒業研究、3名)

3名が、①「都農町の史跡名所を巡るサイクリングルート開発」、②「都農町のコミュニティ交通の現状・課題と改善」、③「都農町中心部の歩行空間の改善」に関する調査研究を実施した。①では、宮崎県建築士協会と都農町観光協会と協力して制作・設置した横板型の観光案内サイン4基について、町民へ認知度、視認性、デザイン性などのアンケートを実施した。視認性とデザイン性については概ね好感を持って受け入れられていた。しかしながら、横板型の観光案内サインは高価なために、サイクリングルートの案内を意図するとともに費用と設置の簡便性を考慮した柱型案内サインを試作した。②では、宮崎県内市町村のコミュニティバス・乗合バスの特徴を分析した。令和5年度から都農町コミュニティバスを運行している三和交通に運行状況をヒアリングした。また、都農町と類似規模の宮崎市田野地区の乗合タクシー、宮崎市高岡地区の乗合タクシーの運行状況をヒアリン

グした。これらのヒアリング結果を参考にして、都農町のコミュニティ交通システムの改善案を作成する予定である。③については、町道東裏線の歩行環境調査を実施するとともに、路側帯の拡幅と車道の1.5車線化について、沿道住民、通学時の見守り隊の方、東小学校PTAの方へアンケートを実施した。アンケート回答と分析結果に基づいて東裏線の改善を提案する予定である。

(5) 出口ゼミ3年生(実践Ⅱ、Ⅲ、3名)

2名が都農町の観光の振興やイベントの周知・参加の促進を目的とし、都農町観光協会と協力して、Instagram投稿実験と分析を実施した。実践Ⅱで、投稿の閲覧者の好む傾向を分析し、実践Ⅲでは、この分析結果を参考・反映して都農町観光協会の職員の方に投稿してもらった。その結果、インプレッション(表示回数)が「いいね」の数に影響し、インプレッションを伸ばすことが重要であることが分かった。

2.5 PBL (Project Based Learning) I (1年生選択、通年)

1年生28名が受講した。企画・参加したのは以下の6プロジェクトである。

- ①「都農ワインハーベストフェスタ・産業祭り」(11月5日)
- ②「寺迫そば打ち交流」(11月11日)
- ③「旧車の祭典」(11月19日)
- ④「一之宮マルシェ」(12月10日)
- ⑤「こどもカフェ+クリスマスパーティ」(12月16日)
- ⑥「都農中学校・彌勒祐徳絵画展」(1月13～19日)

受講生は上記の中の2つのプロジェクトに参加して、企画、アンケート実施・分析、改善へ

の提案等を1月25日にポスター発表した(写真7)。



写真7 PBL I履修生による「旧車の祭典」(上)、「こどもカフェ・クリスマスパーティ」(下左)、「彌勒祐徳絵画展」(下右)参加・企画の様子

2.6 PBL (Project Based Learning) II (2年生選択、通年)

3名が寺迫地区で①「デジタル茶室」(6月2日)と②「そば打ち交流」(11月11日)を企画・実施した。これらのプロジェクトは、2022年度授業の「地域探索実習I」で寺迫地区を訪問した学生が提案して実現した(写真8)。また、1名が下浜地区の駐車状況を調査した。このプロジェクトは2022年度の「都農町下浜地区の津波避難経路調査」を継続した内容であり、自家用車で避難できるかの基礎データとなるものである。



写真8 PBL II履修生による「デジタル茶室」(左)、「そば打ち交流」(右)の様子

3. その他の活動

3.1 NPO 法人たわわハートネットとの連携

講座では、都農町を拠点とし地域内外における交流促進を目的として活動を展開する「NPO 法人たわわハートネット¹²⁾」（以下、ハートネット）と連携し、学生による正課外の活動を受け入れている。

今年度は、7月22日（土）に「ふれあいの居場所¹³⁾」において「宮大主催お楽しみ会」を企画・開催した。ハートネットが定期的に町内の園児・児童等向けに開催する町内のゴミ拾いイベントにあわせて、保護者とともに楽しんでもらう活動である（写真9）。前述のPBL Iの履修生が自主的に企画したうえで、ヨーヨー釣りやスイカ割り、射的ゲームを実施したほか、3年生3名による焼きそばの提供を実施した。また12月26日（火）には、ハートネットと主催の餅つき大会を開催したが、PBL Iの履修生と農学研究科の学生が運営支援に努めた（写真10）。

講座とハートネットとの連携は4年目となったが、正課外においてもこうした地域活動への自主的参画がみられるようになってきた。参加した学生の多くはPBL受講経験者であり、PBLの教育目標のひとつである地域におけるプロジェクト・マネジメント力の涵養に向けた地域活動の実践が、正課外の自主的なそれ¹⁴⁾へと活動領域を拡大させる契機となったとみることもできる。



写真9 学生らによる「お楽しみ会」運営



写真10 年末の餅つき大会運営支援

3.2 ツノスポーツアカデミーとの連携

昨年度に引き続き、農学研究科修士課程2年の学生2名¹⁵⁾がツノスポーツアカデミー（以下、アカデミー）に在籍する中高生らに向けた、キャリアデザイン設計についてのワークショップを7月より翌1月まで月に1度開催した。

アカデミーは、都農町を本拠地とするサッカーのクラブチームの2つの下部チーム（U-18、U-15）を運営している。アカデミーでは、彼らの地域活動や語学教育等には注力してきたものの、進路指導の面では具体的な職業観を持たぬまま卒業させてしまうことを問題視していた。アカデミーの抱えるその悩みに応えるかたちでの取り組みである。自らの将来を見据えた進路選択を検討するためのワークショップに取り組んできた。中高生に対し、具体的な職業を自ら調べ多様な選択肢と進路を意識させるための作業と最終回での発表までの流れのなかで、今年度の活動で新たに取り入れたのは、生徒一人ひとりへの面談であった。受講した生徒十数名のすべてが明確な将来設計をし、なかには大学進学を目指す生徒も数名であった¹⁶⁾。



写真11 ワークショップでの講義の様子

4. むすび一次年度に向けた課題など

講座では、1年生必修科目「地域学基礎」「PBL I、II」「地域探索実習 I」の3つの科目において、地域実践活動を取り入れた教育課程に取り組みほか2つの研究室でも都農町でのフィールドスタディに取り組んでいる。「地域学基礎」で取り入れている「地域資源マップ」づくりの地域実践は、先進事例のみならず社会表象論、空間理論などからもその有用性が示されている。また利便性、市場性、計算可能性の追求によって見落とされた事象への着目の重要性は、資源論、地域論一般において議論されてきていることから「地域資源マップ」作成の意義そのものについて疑義の余地はない。学生による授業評価アンケート結果でも「地域学とは何か、地域資源とは何か」という本学で学ぶ上で重要なことを学び、これからの学習の基礎に出来た」「現在の日本の問題などを俯瞰的な視点で学ぶことができた」「都農町について座学とフィールドワークを通して地域の資源とは何かを学び、領域横断的な学びについて考えることができた」「難しい内容だったが、いかにも「大学の講義」という気がして面白かった」「フィールドワークの目的や意義が明確になり、これからの実習でも役立つと思った」との回答が得られている。課題として「地域資源マップ」の内容の評価方法の検討が挙げられるが、本学が掲げる地域資源創成の内容についての議論にもとづき検討していく必要がある。「地域学基礎」におけるこの実践は、ここに寄与できる可能性がある。

一方、PBLの取り組みには、本稿で触れたように正課外の地域活動への関心喚起に寄与する側面が確認されたものの、講義の組み立てから評価方法に至るまで全般的に大きな課題がある。近年はアクティブ・ラーニングを学部学科によらず科目として導入する例が増えるなか

で、関連する議論が蓄積してきたことから、本学が目指す地域資源創成を可能とする人材育成の観点からのプロジェクト学習のあり方についての議論を深めていく段階にある。

この議論を難しくする事情として、プロジェクト学習が非認知能力の涵養を目的とするがゆえの評価の困難性にくわえ、実践活動の非日常性から、取り組むことだけで「それなり」の活動に見えてしまうことなどがあげられる。そのことが根拠のない礼賛や「やりっ放し」につながり、活動やそこから得られた学びについての省察に至らないケースもみられる¹⁷⁾。講座では当初よりこのことに薄々気づいていたものの、未だ明確な方法論を確立できていない。

こうした問題の解消に向けては、第一に、取り組むに際しその意義についての本質的な理解を促すことが挙げられる。すなわち、実践を通じた学習のねらいや方法についての様々な議論を学生に対しても示し共有していくことである。もとより講座が「地域学基礎」とPBLの双方を担当した意図はここにある。PBLの履修生には「地域学基礎」で学んだことを常に意識しつつ取り組むことを伝えながら進めている。第二に、活動終了後の振り返り感想レポートの提出で済まらず、活動報告書のレベルまで学生らと双方向のやり取りをしつつ省察を深めていくといったことである。そしてこれらの経験を通じ、地域における実践学習の方法論として構築し提示していく必要がある。その他、教員側が「それに足る」活動内容を履修学生数に応じて用意する必要があり、その企画立案から講義の準備、実践活動などに要する時間や労力の負担の大きさなども切実な検討課題といえる。

注

- 1) 瀬川 (2021)、同 (2022)、瀬川・出口 (2023)。
- 2) PBL I とし、前者を PBL II と改称した。

- 3)資源論の内容と依拠した議論などについては、瀬川・出口(2023)にて紹介したため省略する。
- 4)学生が作成した地域資源マップは、過去に作成したものも含め地域経営学講座が開設するホームページにてすべて閲覧可能である (<https://www.miyazaki-u.ac.jp/miyadaitsumo/activity-report/>)。
- 5)厚東(1991)、若林(2009)、Tuan.Y(1977)、Relph.E(1999)、Berque.A(1982、2009)、Jonston.R.J(1991)などの議論をもとにした。
- 6)マップづくりを活用したまちづくりについての取り組みとして松岡(2008、2009、2010、2013)、丸山・栗本(2015)、吉川(2018)、吉本(1999)などを参照した。
- 7)マネジメントの基礎となる経営理論(経営学、マーケティング、会計学)や実際のマネジメントにおいて必要となる、社会構造や経済、法制度等に関する基礎知識を身につけることを目的とした専門科目群であり、1年前期から2年前期にかけて履修する。そのうち本実習における分析プロセスにおいて関連の強い科目としては「経営学概論」「マーケティング論Ⅰ」「会計学Ⅰ」「プロジェクト・マネジメント」「企業化精神とイノベーション」などである。
- 8)訪問先別に、グループ①は宮崎市と日之影町、グループ②は都城市と東米良地域、グループ③は日向市と五ヶ瀬町、グループ④は日南市と高千穂町、グループ⑤は延岡市と西米良村、グループ⑥が都農町である。
- 9)講読順に小田切(2021)、山下(2008)、安室(2020)。講読した雑誌論文は多数に及ぶためここでは示さない。
- 10)年中行事のひとつ。新型コロナ対策により3年ぶりの開催となった。
- 11)3年生の活動とあわせて企業マネジメントコースの実践報告会で発表予定である。
- 12)内閣府NPOホームページ(<https://www.npo-homepage.go.jp/npoportal/detail/045190555>)、当該法人ホームページ(<http://tawawa810.blog.fc2.com/>)参照。
- 13)ハートねつとの活動拠点である。口蹄疫による被害からの復興を目的とした義援金を原資とし宮崎県弁護士会が購入した空き家を都農町に寄附した。現在ハートねつとが活動拠点として管理運営し町民が気軽に立ち寄れるスペースの役割も果たしている。
- 14)そうした学生の地域活動への積極性は、PBLにおける「実利的」なプロジェクト学習のスキームによるものではなく、地域活動主体らとの触れあいや交流から地域活動の重要性の意識が醸成され現れたものと考えられる。参加学生らによれば、PBLの受講を通じて、多彩な地域活動の経験が地域人材としての将来に活かされることを感じとり、在学中にできるだけ多くの活動に参加したいとのことであった。
- 15)農学研究科応用生物学専攻修士課程2年の外山大夢、内山智浩氏の2名であり、講座開設時から都農町での活動に関心を持ち取り組んできた。彼らの学部学生の活動は瀬川(2022)にて紹介した。2名ともに今年度をもって大学院を修了し就職するため、宮崎大学の学生としての最後の地域活動となった。
- 16)アカデミーの松森監督は、漠然と大学進学をイメージするだけでなく、具体的な学部や専攻まで意識し、進学に必要な具体的な取り組みや姿勢にまで言及する生徒が数名でてきたことがこの取り組みの大きな成果であり、続く下級生へのプラスの影響なども期待している。
- 17)前者は、活動における役割自体の評価にも及ぶ。後者は、活動自体の話題性、すなわちメディア等への露出や参加者の喜びの声などのみをもって礼賛されることで、学習自体の評価を妨げてしまう側面などである(亀倉・溝上、2016など)。

—— 参考文献 ——

- 安室 知(2020)『都市と農の民俗：農の文化資源化をめぐる』慶友社。
- 岡本秀明(2012)「都市部在住高齢者の社会活動に関連する要因の検討：地域におけるつながりづくりと社会的孤立の予防に向けて」『社会福祉学』第53巻3号，pp.3-17。
- オギュスタン・ベルク著，篠田勝英訳(1990)『日本の風景・西欧の景観そして造景の時代』講談社現代新書。
- 亀倉正彦著・溝上慎一監修(2016)『失敗事例から学ぶ大学でのアクティブラーニング：アクティブラーニングが未来を創る』東信堂。
- 川田 力(1992)「わが国における教育水準の地域格差：大学卒業者を中心として」『人文地理』第44巻1号，pp.25-46。
- 小田切徳美(2021)『農村政策の変貌：その軌跡と新たな構想』農文協。
- 厚東洋輔(1991)『社会認識と想像力』ハーベスト社。
- 瀬川直樹(2021)「地域経営学講座(都農寄附講座)

- における実践教育の試み—PBL, SL の実践に向けて—『宮崎大学地域資源創成学部紀要』第 4 号, pp.87-106.
- (2022) 「地域経営学講座 (都農寄附講座) 活動報告—地域経営学講座 (都農寄附講座) における実践教育の試み—」『宮崎大学地域資源創成学部紀要』第 5 号, pp.41-50.
- 瀬川直樹・出口近士 (2023) 「地域経営学講座 (都農寄附講座) 活動報告 (2022 年度) —地域経営学講座 (都農寄附講座) における実践教育の試み—」『宮崎大学地域資源創成学部紀要』第 5 号, pp.41-50.
- 手書き地図推進委員会編 (2019) 『地元を再発見する! : 手書き地図のつくり方』学芸出版社.
- 竹中克行編著 (2015) 『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房.
- 辻本千春 (2012) 「スポーツ観光による地域活性化に関する一考察・新潟県; 健康ツーリズムによる地域活性化の要因・拠点論」『大阪観光大学紀要』第 15 号, pp.23-32.
- 鳥越皓之 (2023) 『村の社会学: 伝統的な人づきあいに学ぶ』筑摩書房.
- 松岡慧祐 (2008) 「個人と社会をつなぐ地図; 現代社会における地理的想像力の可能性」『フォーラム現代社会学』7, pp.100-113.
- (2009) 「情報化社会における地図の変容: デジタル化する地図と社会認識」『人間科学』7, pp.19-38.
- (2010) 「生活空間を表象する地図: 『彩都』の住宅広告における地図の分析を中心として」『人間科学』73, pp.1-20.
- (2013) 「地域メディアとしての地図と社会的実践としての地図づくり: 地域社会における〈マップ〉の想像力」『フォーラム現代社会学』12, pp.3-16.
- 丸山純子・栗本一美 (2015) 「地域マップ作成を取り入れた在宅看護実習での学生の学び」『新見公立大学紀要』36, pp.125-130.
- 三俣 学・齋藤暖生 (2022) 『森の経済学: 森が森らしく、人が人らしくある経済』日本経済評論社.
- 宮崎大学瀬川ゼミナール (2023) 『宮崎県内自治体における空き家対策の現状と都農町の居住・生活環境に関する実態調査』報告書.
- 村社 卓 (2019) 「大都市における高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェの特性: 利用要因および利用に伴う変化に焦点を当てて」『社会福祉学』第 60 巻 2 号, pp. 78-90.
- 山下裕作 (2008) 『実践の民俗学: 現代日本の中山間地域問題と「農村伝承」』農文協.
- 山元公平・松本耕二 (2016) 「離島におけるスポーツ振興による地域活性化の一考察: トライアスロン大会の事例を中心に」『広島経済大学研究論集』第 38 巻 4 号, pp.79-92.
- 吉川美貴 (2018) 『まちづくりの非常識な教科書: 35 万円で 10 億円の経済効果を生んだメソッド』主婦の友社.
- 吉本哲郎 (1999) 「水俣における住民協働の試み: 「地域資源マップ」「水の経路図」づくりから」『環境技術』28(6), pp.435-440.
- 若林幹夫 (2009) 『増補版 地図の想像力』河出書房.
- 渡辺悟史・芦田裕介・北島義和・佐藤真弓・金子祥之編著 (2023) 『オルタナティブ地域社会論: 「不気味なもの」から地域活性化を問い直す』ナカニシヤ出版.
- Berque.A (1982) *Vivre L'espace au Japon*, Universitaires de France (宮原 信訳 (1982) 『空間の日本文化』ちくま学芸文庫).
- Berque.A, 篠田勝英訳 (2009) 『日本の風景・西欧の景観 そして造形の時代』講談社.
- Jonston.R.J (1991) *A Question of Place : Exploring the Practice of Human Geography*, Blackwell Publ. (竹内啓一訳 (2002) 『場所をめぐる問題: 人文地理学の再構築のために』古今書院).
- Relph. E (1991), *Place and Placelessness*, Pion Ltd. (高野・阿部・石山訳 (1999) 『場所の現象学: 没場所性を越えて』筑摩書房).
- Tuan. Y. F (1988) , *Space and Place*, University of Minesota (山本 浩訳 (1993) 『空間の経験: 身体から都市へ』筑摩書房).